木下順二評論集

1968~1969年

10

未来社刊

木下順二評論集 10 【全一一巻】
一九八〇年一一月一〇日 第一刷発行

定価二五〇〇円
©著者／木下順二
発行者／西谷能雄
発行所／株式会社未来社
東京都文京区小石川三の七
振替東京七―八七三八五番
本文印刷＝新協印刷
装本印刷＝形成社
製本＝今泉誠文社

落丁・乱丁本には責任を負います　検印廃止

仮営業所
東京都豊島区駒込 1―3―15
電話 03―943―6841～4番
期間 1980年5月15日～1982年4月30日

凡例

一、本評論集全十一巻は、木下順二の評論、随想のほとんどすべてを可能な限り時間順に収録したものである。但し各巻の内容は、次の六項目に分類整理する。

Ⅰ　主として演劇一般について
Ⅱ　主として自作について
Ⅲ　主として演劇外の問題について
Ⅳ　（以上を〝自〟に即してのものとすれば）主として〝他〟について
Ⅴ　主としてシェイクスピアについて
Ⅵ　その他（あるいは主として馬について）

なお、単行本として既刊の『ドラマの世界』（中央公論社、一九五九年、未来社、一九六七年）、『ドラマとの対話』（講談社、一九六八年）、『随想シェイクスピア』（筑摩書房、一九六九年）及び『シェイクスピアの世界』（岩波書店、一九七三年）は、それぞれ一貫したテーマによる一冊本であるゆえに、本評論集に収録しない。『日本が日本であるためには』（文芸春秋新社、一九六五年）は、雑誌論文などを集めた評論集であるゆえに、分解して本評論集に収録する。

一、本評論集は全十一巻をもって構成され、それぞれの巻には、次にかかげる年度内に執筆されたものを収録している。

第1巻　一九三五年から五〇年まで
第2巻　一九五一年から五三年まで

第3巻　一九五四年から五五年まで
第4巻　一九五六年から五七年まで
第5巻　一九五八年から五九年まで
第6巻　一九六〇年から六一年まで
第7巻　一九六二年から六三年まで
第8巻　一九六四年から六五年まで
第9巻　一九六六年から六七年まで
第10巻　一九六八年から六九年まで
第11巻　七〇年及び補遺

一、本評論集は、現代仮名づかいで統一したが、収録文章が三五年間にわたっているため、漢字の用法その他で不統一な部分がある。しかし、当時の文体を尊重してそれらはそのままとした。

一、各篇末尾に、初出の誌紙名・年月日を判明する限り付した。

一九七二年一〇月

編集　菅井　幸雄
　　松本　昌次

＊おことわり　紙数の都合上、予定を変更して全11巻で完結となります。ご諒承下さい。（編者）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

木下順二評論集 10

目次

凡例

I

舞　台……一一
方言の中に……一四
アイルランド演劇運動について……一七
〃ことばの勉強会〃について……二三
日　本　語……二七
日本語を魅力的に……二九
私見関西弁……三三
ことばの〃意味〃の意味について……三五
思想の言葉……四〇
演劇における正統性……四四
ことばの芸術——劇を中心に……四八
日　本　語……七五
ことばの創造……八〇
美しい日本語とは……八二

II

本郷通り……八九
わが歌舞伎……九四
電気缶切り器……九九
ひとこと……一〇一
僕は食いしん坊……一〇五
志賀的文体と芥川的文体――わたしの文章作法……一〇七
隠居先……一一二
わが不眠症快復の記……一一三
私の一冊――『夕鶴』……一一八
『無限軌道』のこと……一二〇
序文らしからぬ序文――宇野重吉のかたりきかせ『かにむかし』によせて……一二三
時間給三円五十銭――私の教師時代……一二五
数病息災……一二八
作・演出者として……一三一
演出の忙しさ……一三五
蜘蛛についての興味について……一三六
「群読」について……一四〇

不忍池に水上飛行機があった頃……一四五
私のふるさと論……一四九

Ⅲ

蒔く……一五九
大切な教師の人間性……一六一
ある文学的事件――金嬉老が訴えたもの……一六六
金嬉老事件のある余波――「大波小波」の火得剣氏へ……一七一
さまざまの〝無理〟……一七三
おんなと日本語……一七五
テレヴィ……一八七
整理……一九〇
濫読のすすめ……一九三
内攻する敗戦の後遺症……一九五
沖縄返還と人間回復――早大ティーチ・インに寄せて……一九九
沖縄の課題……二〇一
沖縄に渦巻く〝代理戦争〟……二〇五

堀田善衛の中の二つの要素について……二三五
菅井幸雄よ、きみも……二三八
未来を照射する記録……二三一
『極東軍事裁判速記録』――旧刊紹介……二三二
私の古典……二三四
すいせんの言葉……二三七
日本映画を世界に認識させた努力……二三八
映画『質屋』……二三九
『名作歌舞伎全集』……二四五
功績と責任の問いかけ……二四六
遠野盆地―馬への挽歌……二四七
道　真　譚……二五七
茨木のり子におけるドラマ的発想について……二六一
中国文学の邦訳について……二七三
「二つか三つ」を！……二七八
『平家物語』と現代……二八〇
オリファント著 岡田章雄訳『エルギン卿遣日使節録―新異国叢書・9』……二八三
期待のことば……二八六
西谷能雄……二八八

滝沢さんについて……二九〇
うつくしい雪――宮沢賢治『永訣の朝』……二九四
エドマンド・スペンサー著 熊本大学スペンサー研究会訳『妖精の女王』……二九八
作田啓一著『恥の文化再考』……三〇一
関山和夫著『説教と話芸』……三〇四
中野好夫著『人間の死にかた』……三〇七
簸の会発足によせて……三一〇
阿蘇の秋……三一二
アンケート 今年の収穫……三一三
静岡劇作の会に……三一四

V

シェイクスピアの翻訳について――または古典について……三一七
中野好夫著『シェイクスピアの面白さ』……三四一

VI

ウマが好きだから……三四九
好味抄という題を与えられて……三五一
江戸の味――てんぷら〈天満佐〉……三五三
馬書の大群……三五六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

舞台

ただ一枚の不愛想な平面に過ぎないけれども、その上に、どのような見事な花をも咲かせることができる一枚の不愛想な平面が、舞台である。

*

芝居という言葉があって、『広辞苑』を引くと、まっさきに「芝生にいること」という説明がある。そこから、必ずしも学問的とはいえないとしても、決して間違ってはいないと思える次のような解釈を引き出してくることができる。

大むかし、まだ演劇らしい演劇など存在していなかった頃、例えば疾病がはやる。または日照りが続く。そういう、当時としては人力を超えた災厄が起ったとき、人々は広場に集まって神へ、神という概念がまだなかったとすれば超自然的なある力へ、全員心を一つにして災厄克服の祈願をした。

しかし黙ってじっとしていたのでは仕方がないから、ある様式のもとに声を発し身振りをし

た。歌と踊りの、ひいては演劇の原緒的形態の一つだとされるものだが、やがて時が移るにつれて、声を発し身振りを行なう人々と、まわりからそれを見る人々とが分れてきた。

しかし、やる側と見る側とに分れてのちも、それら太古の人々の願望は、やる側、見る側、合わせて全く一つのものであった。何とかして疫病を消滅させたい。日照りをくいとめたい。

そしてまた、そのことを象徴的に説明するかのように、やる側と見る側とは同一の平面の上にいた。一段高い舞台などはなく、やる側も見る側も同じ「芝生の上にいた」のである。それが本来の演劇の精神なのであった。

今日劇場やホールへ行く人々は、入口で切符を買って客席に坐っていると、やがて幕があき、するとその奥の一段高いところに舞台というものがあって、自分とは関係のない人たちがその上でなにごとかを行なってみせてくれるのを見、または聴く。おもしろければおもしろい。つまらなければつまらない。

ということでは、実はしかしいけないのだと私は思う。劇場やホールという建築物ができ、舞台は向うに一段高い場所としてつくられるものとなった今日でも、やはり舞台の上の人々と客席の人々とは、同じ「芝生の上にいる」というのでなければ、つまり舞台と客席とが同じ願望、同じ感動において一つに燃えるということになるのでなければ、舞台というものの存在の意味はなくなってしまうだろうと、私には考えられる。

*

そういうすべての意味を含んで、不愛想に横たわる一枚の平面が舞台である。だがその不愛

想な平面の中に、場内を一つに包んで躍動する小宇宙がつくりだされるどのような可能性でもがひそんでいる。その可能性を引きだして花ひらかせてくれる人々を、舞台は常に待っているといえる。

（「熊本日日新聞」一九六八年一月一日）

方言の中に

あることばが「美しい」か否かを判定することは、あることばが「良い」か否かの判定よりはやさしいとしても、実は決して手軽な仕事ではないはずである。それは、私の考えるところでは、ことに日本語の場合、なにを国語の基準にすべきかがまだまだはっきりしていないからということもあるのだが、その問題に立ち入ると長くなるので今はやめておこう。ところで美しいといっても、文学語としてしか通用しそうにないものと、会話の中に生かされてしかるべきものとがある。文学語は専門の文学者がえらびとって使えばいいのであって、日本語全体の問題としていうと、私は日本語の日常会話の中に、もっと大胆に方言の中の美しい（また良い）ことばがとり入れられ、全体としての日本語がもっと美しく豊かに、かつ力強いものになってゆくことのほうが重要だと常々考えている。

雨に関する方言を考えてみようか。慈雨のことを「おしめり」というのは一般的だが、愛媛県の大三島では「おうるい」というそうだ。以下地名は省略するが、日照り雨、つまりキツネ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com